

第10回 定期市

インドの西ベンガル州、UP（ウッタラプラデシュ）州、タミルナード州、およびバンガラデシュのタンガイル県のそれぞれで、20～30の定期市調査を行った。その詳細は2006年9月に出版された『南アジアの定期市』に詳しい。ここでは北インドUP州での調査結果のうち、売り手のカーストとその伝統的職業に関する見分を示しておきたい。

北インドUP州、ハルDOI県サンディラ地区の定期市に集う商人の性格・行動を明らかにする調査を89年11月25日から90年1月5日にかけて、サンディラ郡の2地区（サンディラ、バラワン）の全定期市31のうち30の市にでかけ、市商人の配置図の作成、市に関する一般情報の収集、商人からの聞き取り（年齢、家族構成、土地所有、所属カースト、販売品目とその仕入れ地、生産地、1週間のスケジュール、交通手段、兼業状況など）を行なった。この他に、一つの毎日市、一つの祭礼市の調査も行なった。この地区の定期市は週2日市が多く、いずれも午後市（4時頃ピーク）であった。

売手数から定期市の規模をみると30市の平均が197で、最大がゴンドア市の485であった。業種数（全38）では平均が20で、最大がバフリア市の29であった。野菜売り、香辛料売りおよび煙草（ビートルリーフを含む）売りがすべての定期市で、穀物、菓子、食糧油、装飾品、衣料品売り、および靴直し、床屋が8割以上の定期市でみられた。市商人はほとんど（90%以上）が男性で、女性は野菜、穀物、装飾品売りなどにちらほら顔を出しただけであった。そんな中で、卵売りだけは10才前後の女の子が多かった。土地所有の規模は野菜、穀物売りが大きく、装飾品売りやサービス提供者（床屋、鍛冶屋など）は無土地所有のものも多かった。1日の純益は200円以下のものが多かった。現金取り引きを主としつつも、信用売りもみられた。副業としては、農業労働が多かったが、行商、ジャジマニシステムの中で顧客廻りをするものもみられた。

定期市商人の行動範囲は狭い。販売に出かける市は自宅から10km圏にほぼおさまっており、それも週2日市であるため近くの2～3カ所にでかけるにすぎない。仕入にしても、野菜、果物、穀物は自作販売が多いし、それらを仕入れるにしてもサンディラなど最寄の中心地で事足りる。せいぜい20kmたらずの移動ですむ。西ベンガル州のタムルク地区の野菜売りが60kmはなれたコルカタへ仕入れにでかけていたのに比べると、彼らの行動圏は狭い。コルカタに匹敵する大中心地はここではラクノウであるが、そこへは装飾品等の工業製品の仕入れにときどき出かけるにすぎない。売手・買手ともに自転車利用者が多かった。

定期市商人の過半数がマイショールという農民カーストであった西ベンガル州とは異なり、ここでは様々なカーストに属する人々が売手、サービス提供者として市にやってくる。バラモンは市に出るのだろうか。イスラム教徒はどんな商売をしているのであろうか。床屋（Nai）はいかなるカーストの髪をかるのだろうか。こうした疑問、すなわちカースト本来の伝統的職業が市でどの程度反映しているのか、といった点について注目して、サンディ

ラ地区の市商人のカーストと販売品目／サービスを示すと次のようである。

30の定期市で247人の市商人に聞き取り調査をおこなった結果、ヒンドゥー教徒は27カースト、計191人、イスラム教徒は56人であった。聞き取り数で10人以上の上位7カーストの内訳を示すと、バラモン（伝統的職業は司祭）は19人中、6人が香辛料、4人がケロシン、2人が衣類売りで、以下、穀物、菓子、食料油、装飾品、食器売り、さらには自転車修理業と多種にわたっていた。祭祀にたずさわり、手を汚さないというバラモンのイメージが覆された結果であった。テリ（油絞り）19人はどうかというと、9人が食料油売りで本業と関係していたが、装飾品、野菜、穀物、香辛料、タバコ、魚、菓子売りと多様であった。アラクという農業カースト17名は8人が野菜、3人が装飾品売りで、その他に魚、衣類売り、さらには仕立屋もみられた。チャマル（皮革業）はカーストの体系では不可触民という最下層に位置づけられているが、16人中、伝統的職業に関係する靴修理をおこなっていた者は4名で、他に穀物、香辛料、食料油、竹製品、衣類販売と、これまた多様な販売／サービス業をおこなっていた。バニア（商業）は工業製品である食器、装飾品、衣類、ケロシンに加えて香辛料、穀物、菓子、食用油と多くの製品を扱っていた。ナイ（床屋）は12人中8人が床屋としての店を構えていたが、仕立屋とタバコ売りが各1名いた。ロハール（鍛冶屋）10人は鍛冶製品の販売5人と鍛冶屋サービス4人（1人不明）と全員鍛冶関係であった。

以上のように、ヒンドゥーカーストは伝統的職業を市場で示しているかということ、鍛冶屋のような場合はむしろ例外的で、ほとんどが伝統的職業とは関係のない販売活動をおこなっていた。

イスラム教徒の売り手に注目してみると、第1にイスラム教徒もヒンドゥーカーストと同じように同族名がありそれぞれが伝統的職業を持っていた。最も多かったのがアンサリ（織物業）22人で、マハニール（バンダ売り）12人、クレシ（肉売り）6人、ファキール（物乞い）3人、その他ジュラハ（仕立屋）、ダルジー（仕立屋）、チクワ（肉売り）、マダカ（物乞い）などである。アンサリは衣類販売が8人いたが、残りは履き物、装飾品、食用油、タバコ、香辛料、穀物、床屋と様々であった。肉売りのクレシ、チクワは全員が肉売りであり、バンダ売りのマニハールも12人中11人が装飾品と伝統的職業に従事していたが、仕立屋のジュラハは食用油売り、物乞いのファキールは装飾品、履き物売り、同マダカは野菜売りと様々であった。

次に示す図2はインド農村地域の定期市での販売品およびサービスの流通をモデル化したものである。図3はサンディラ地区の定期市の分布である。

インド農村の市場

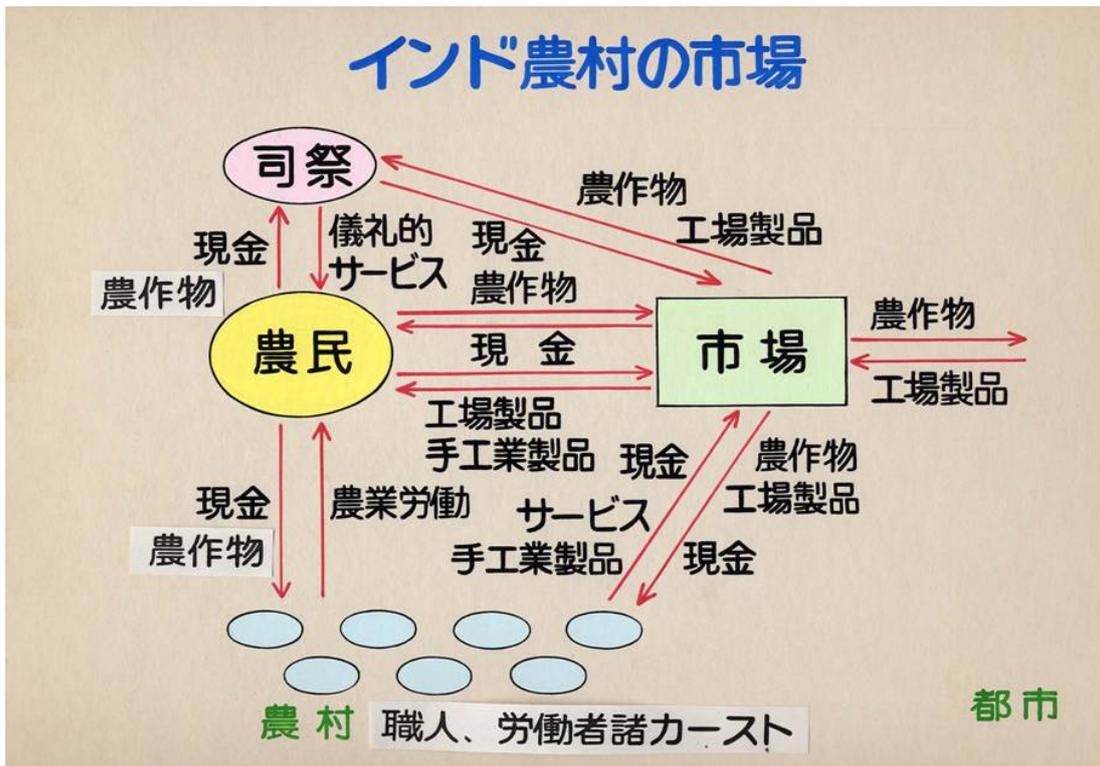


図2 インド農村の定期市における商品・サービスの流通

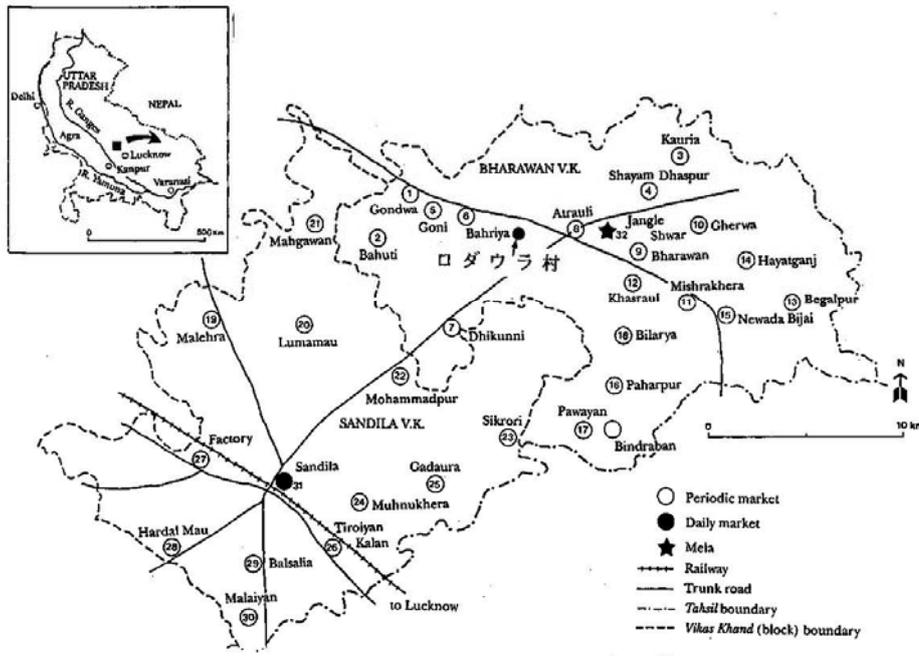


図3 北インド、サンディラ地区の定期市